

研究室
から東京農業大学大学院
農学研究科バイオセラピー学専攻
博士前期課程2年

動物介在療法学研究室

永澤 巧さん

人と猫はもともと、互いに
「癒やし合う」存在なのかもしれない。動物の持つ人への健康効果の
メカニズムを日々、探り続ける
永澤巧さん。「アニマルセラピー」
がもたらす多くの可能性を
見つけてきたその研究人生と、
将来の展望を語ってもらった。永澤さんが東京農業大学に入学
したきっかけは、高校生のころに
見た「アニマルセラピー」を取り
上げたテレビ番組だったという。
アニマルセラピーとは、動物が有
する「癒やしの力」を利用して人
を健康にするという療法活動のこ
とで、「動物介在療法」とも呼ば
れる。「私はもともと動物が好き
でしたが、動物が人の病気を治し
て健康にするということは全く知
りませんでした。動物の持つ人へ
の健康効果についてもっと詳しく
知りたいと思い、アニマルセラピ
ーについて学ぶことができる数少
ない大学の一つである、東京農業
大学への進学を決めました」永澤さんは大学3年次に、希望
通り「動物介在療法学研究室」の一
員に。念願の研究室で、実際に
馬や猫の飼育を経験しながら動物
介在療法を学んだ。神奈川県厚木
市内の小学生、そして発達障害を
持つ方や脳性麻痺患者など多様な
人たちへの、実践的な動物介在活人と猫のより良い
共生社会を実現する研究室で愛猫「白雪（シラユキ）」を
抱く永澤さん動も行った。「実際の活動を模し
て学生同士で計画していく過程は
学びが非常に多く、なによりも活
動の後に大きな達成感を味わうこ
とができました」と永澤さん。
学びのなかでは、衝撃を受けた
こともあった。それは、動物が人
を癒やすメカニズムには現在も未
解明な部分が多い、ということだ活動への影響を探る」とし、猫が
もたらす人への健康効果を、脳機
能の側面から明らかにすることを
目指して論文を仕上げた。「結果
として、猫を撫でたり遊ばせたり
することで、多様な認知機能を司
るといわれる前頭前野領域を活性
化することが明らかとなりました」
と、努力の成果を振り返る。
しかし、永澤さんにとってそれ
は通過点に過ぎなかった。「猫の
秘めたる健康効果を証明するには
まだまだ不十分であり、研究を続
けていきたい気持ちが残りました」
また、卒業論文を作成して
いくなかで、研究活動が自分の性
に合っていることを肌で感じるこ
とができ、非常に楽しい日々を送
ることができました。永澤さん
は、大学院に進学することを決断
した。

「猫側」にも目を向ける

大学院では、「人側」だけに着
目するのではなく、「猫側」にも
目を向けて研究をしている。動物
介在療法において、動物も一緒に
健康になるような活動が最も理想
的な形であるからだ。大学院での
研究テーマは「人と猫の接触的コ
ミュニケーション場面における双
方の生理的影響を探る」。これま
での研究で、猫を触ることで人は
気分状態が改善し、脳機能が活
性化するとともに、「幸せホルモ
ン」として近年、注目されるよう
になったオキシトシンの分泌を誘
発する可能性を示すことができ
た。「これらの結果は、猫がもた
らす健康効果発現のメカニズムの
一端を明らかにしている可能性
があります。そして、猫の尿中の
生理活性物質を測定した結果、人
からの接触コミュニケーションが断たれることで、ストレスホルモ
ンの一つであるコルチゾールが上
昇することがわかりました」と永
澤さん。つまり猫も、人との接触
的健康になるような活動が最も理
想的コミュニケーションを重要な
ものとして認識している可能性が
ある、ということになる。
永澤さんは、自身が行っている
研究が人と動物のより良い共生社
会の実現の一助になると確信して
いる。現在、日本では多くの動物
が殺処分されており、特に猫はそ
の数が多く、永澤さんは、「動物
介在療法学を発展・普及させ、動
物の持つ癒やしのメカニズムをよ
り科学的に証明することができれ
ば、一般家庭における動物の飼育
を促進することができそうです。さ
らには、動物の社会的地位の向上も
期待でき、動物遺棄や虐待の減少
分野の発展に大きく寄与できる人
材になりたいと考えている。愛猫はほかにも——
「ドルフ」(左)と「モグ」東日本支援
プロジェクト
活動報告会

相馬市復興の成果を報告

「農業復興には東京農大の知恵が必要」 相馬市長

福島県相馬市内で2月16日、平
成30年度東京農業大学東日本プロ
ジェクト活動報告会が開催され
た。東京農大は東日本大震災の直
後から、福島県相馬市の復興のた
めに教員と学生が相馬市と協力し
て活動してきており、報告会には
地元の農家ら60人以上が参加し
た。報告会の冒頭、高野克己学長
は、23年から続く震災復興の成果
を基に、より強固な支援体制とす
るため、昨年12月に改めて東京農
大と相馬市との包括連携協定を結
んだことを紹介。立谷秀清相馬市
長は「農業の復興については東京
農大の知恵が必要」とし、放射能
の風評被害などの対策についても
全国への理解が深められるよう努
めていきたいと語った。

立谷相馬市長



高野学長



鈴木さん



柿沼さん

後半では、農芸化学科の大島宏
行助教が「相馬地域農業のための
これからの土づくり」について報
告した後、国際農業開発学科4年
の柿沼穂垂さんが卒業論文のテー
マでもある「福島の森林で昆虫を
調査してわかったこと」を発表。
最後に大学院(林学専攻博士前期
課程)2年の鈴木郁子さんが「阿
武隈山地のクマ・イノシシ・サル
・カモシカの今」について報告し
た。
報告会に参加した、相馬市内で
大豆や米を生産する農家の男性は
「放射性セシウムのことなど、新
たな知識を得られ勉強になった」
と話した。
半杭准教授のツイッターで今回
の報告会を知り福島市から参加し
た女性も「福島市民である私たち
が、放射能による風評被害などで
福島県の農産物に自信をなくし、評
価を下げていることに驚いた。こ
の自信のなさには下の世代まで伝染
してしまうとのこと。気を付けた
い」と語った。

参加者との質疑応答

